

# 性役割の受容性と女性像に関する研究

藤 田 主 一

## I. 問 題

青年期は、人間の発達段階 (developmental stage) において、思春期に引き続き壮年期に至るまでの時期にあたり、児童期を脱して種々の特徴的な変化を示すところである。年齢的な側面に対応させると、中学校の制服を着る12歳ころから大学を卒業して社会に巣立つ22~24歳ころまでの時期を指すことが多い。青年期にいる人達にとって、身体的な変化とともに精神的な成長、特に性的な成熟、同性や異性に対する量的・質的な関わり方への葛藤が増加する。

男女間の性差 (sex difference) は、生物学的な性差と心理学的な性差に区別される。生物学的な性差は、生理的・身体的に顕著で生得的である。男女の性別はすでに個体発生の時点で決定され、それに基づいて男女それぞれの性腺や性器などが分化し、発達する。これらの中には、例えば性器の違いのように誕生時から明瞭に弁別できる性差ばかりでなく、思春期から青年期にかけて発現する第二性徴といわれるものまで、生物学的といっても必ずしも男女間でその発達が一樣ではない。第二性徴として現れる生理的・身体的な変化には、男性の場合の精通現象や男性的体格、女性の場合の初潮現象や女性的体格など、実に多くの特徴が存在している。いずれにしても、生理的・身体的な性差は、人間の性を生物として捉えた生物学的な性差を意味し、それは時代あるいは文化が異なっても普遍的に認められるものである。

これに対して、心理学的な性差は心理的・行動的に認められる性差である。それは生物学的な次元と違って時代や文化を越えて普遍的に認められるものではなく、生後のさまざまな環境や経験によって形成されるものである。そこには、個人が生活していく社会や、その時々々の文化形態、さらに時代的背景が大きな意味を持つために、個人は広く社会全体の期待に沿う形で性に基づく役割を形成していく。生後間もなくから、命名に始まり、服装や髪型、玩具や遊びなどを通して、それぞれの性に期待される働きかけが行われる。このような意味において、心理学的な性差は個人を取り巻く多種多様な社会環境の影響から獲得され、固定化していくと考えられる。もちろん、性差に関わる問題は、個人の発達過程を考察するだけでなく、その時代や社会における価値観や教育観の基準も忘れてはならない。おそらく、性に応じた役割が時代によって変化するといっても、女性が自らの性と生殖をめぐる固有の役割から解放されることはあり得ない。性についての

役割が社会的なものであるといっても、生理的・身体的な基盤を無視するわけにはいかない。このことを考えると、性についての役割（性役割）は生物学的な根源を持つとともに、社会的・文化的な方向性を持つといってよいであろう<sup>1)</sup>。

さて、ここで性役割 (sex role) という心理学上の概念を考えてみよう。先に触れたように、男性と女性という性の違いを「性別による役割」とすれば、ここで扱う性役割という概念は、この性別役割とはかなり性質を異にする。東・小倉<sup>2)</sup>の要約を挙げておこう。

- (1) 性別役割は生物学的性差に必然的に付随するものであるのに対し、性役割は、生物学的性差を基準としてはいるが、その必然的な所産ではない。
- (2) 性役割は、性別役割に何らかの価値づけが介入したものである。
- (3) 性役割は、人間が生後の環境の中で学習していくものである。

このことは、人間は誕生した時には中性であり、誕生した時の外見的な形態の差によって性別役割を与えられて育てられること、つまり、性別役割は社会化の過程の一部という見方ができる。さらに、福富<sup>3)</sup>は性別役割の定義について、「役割という概念を性に当てはめたものが『性別役割』である。すなわち、男性と女性を社会の中の一つの地位としてとらえ、それぞれの性に対して社会が期待する態度や行動様式の総称を性別役割と考えるのである」と述べている。性別役割といっても、そこにはいくつかの側面が含まれているので、それらを適切なレベルに分けて考察する必要があるという指摘は多い。飯野<sup>4)</sup>は次のようにまとめている。

Lynn<sup>5)</sup>は、性別役割を「性別役割選好 (sex-role preference)」、性別役割採用 (sex-role adoption)」、性別役割同一性 (sex-role identification)」の3つの側面に分けた。性別役割選好とは、男性あるいは女性にふさわしいとされている行動をしたいと望む傾向である。性別役割採用とは、性別化された行動を実際に行うことである。性別役割同一性とは、自分を男性あるいは女性と結びつけることであり、その性を特徴づけるような無意識的な反応のことである。

Biller<sup>6)</sup>は、性別役割を「性別役割選好」、「性別役割採用」、「性別役割志向 (sex-role orientation)」に分けた。前2つはLynnの考え方を基にしている。性別役割志向とは、自分自身の男らしさあるいは女らしさについての評価のことである。

柏木<sup>7)</sup>は、性別役割概念を「性別役割行動」、「性別役割観」、「性別役割同一性」の3つの側面に分類した。性別役割行動とは、自分の性に対して社会が期待している行動や性格・態度などの特徴を、実際にどれだけ身につけているかという性別役割の実現度のことである。性別役割観とは、性別役割に関する自己の価値観を形成することである。また、性別役割同一性とは、社会的な性別役割期待や自己の性別役割観に自分自身を照らし合わせた時の自分自身に対する男らしさ、女らしさの自己評価・自己認知のことである。

東・小倉<sup>2)</sup>は、性別役割を「性別役割パーソナリティ」、「性別役割観」、「性別役割受容性」の3側面に分けている。性別役割パーソナリティとは、社会から性に依りて期待される一連のパーソナリティ

特性であり、行動レベルに限らず、意識のレベル（興味や信念）に及ぶものである。性役割観とは、性役割に対する個人の評価を指す。性役割受容性とは、自分の性別に従って期待されている役割をどの程度受容しているかの測度のことである。

飯野<sup>4)</sup>は、上記のように分類され提出された側面を、それが扱っている対象に従って再度まとめ直している。第1に性役割の認知的な側面 (Cognitive)、第2に性役割の現実的な側面 (Real)、第3に性役割の自己概念の側面 (Self-concept) である。これらの側面と各研究との関連が、表1に示されている。これを、「性役割の BIG-THREE」と呼ぶことができるだろう。

ところで、男性と女性の性役割観の変化を発達的に考察すると、男性と女性の同性、異性に対する評価と遂行に性差が認められる。児童期においては、男女とも同性を高く評価する傾向にあるが、思春期から青年期へと移行するに従い、男性を積極的に、女性を消極的に評価し始め、特に女性の方が同性よりも異性をより積極的に評価するようになる。さらに、男性の性役割観の発達が比較的単純に進むのに対し、女性の性役割観の発達は複雑な経過をたどるようである<sup>2)</sup>。児童期から思春期にかけて、男性は伝統的な性役割観を容易に受容するのに対し、女性は男性ほどそれを容易に受容していない。柏木<sup>8)</sup>も述べているように、親が躰という形で強調した場合、男性

表1 性役割の3つの側面（飯野）

研究者	側面		
	Cognitive	Real	Self-concept
Lynn	性役割選好 (sex-role preference)	性役割採用 (sex-role adoption)	性役割同一性 (sex-role identification)
Biller	性役割選好 (sex-role preference)	性役割採用 (sex-role adoption)	性役割志向 (sex-role orientation)
柏木	性役割観	性役割行動	性役割同一性
東・小倉	性役割観	性役割パーソナリティ	性役割受容性

は伝統的な性役割に合致した子どもに成長するが、女性に同様の躰をすると、伝統的な性役割観とは逆のものを持って成長するようになる。つまり、男性が男性役割を積極的に受容しているのに対し、女性は女性役割を否定的・消極的に受容し、伝統的な性役割と自己の期待する性役割との間にズレを感じている。そして男女とも、女性役割を男性役割より低く評価している。

次に、性役割受容性に関わる調査結果を取り上げてみよう。例えば、1984年に公刊された「東京都小・中・高校生の性意識・性行動に関する調査報告」<sup>9)</sup>の中に、「自己の性認識」に関する項目が含まれている。質問内容は「あなたは、自分が男や女に生まれてきたことをどう思っていますか」というもので、小学校5年生から高校3年生までの男女、計8,627名が回答している。ここで自己の性役割を肯定する比率について示しておこう。ただし、( )内は自己の性役割を否定した比率を参考までに載せたものである。

- (1) 小学生5年 男子91.6% (1.0%), 女子65.1% (12.1%)  
小学生6年 男子86.4% (1.1%), 女子62.4% (13.8%)
- (2) 中学生1年 男子74.2% (1.8%), 女子46.3% (17.9%)  
中学生2年 男子75.9% (2.2%), 女子50.6% (13.2%)  
中学生3年 男子75.4% (2.1%), 女子47.3% (17.6%)
- (3) 高校生1年 男子75.4% (3.1%), 女子48.3% (14.8%)  
高校生2年 男子75.4% (2.9%), 女子47.8% (16.1%)  
高校生3年 男子71.9% (5.2%), 女子51.8% (15.2%)

この結果からいろいろな事実が浮上してくるが、男女間で比較すると、どの学年においても男子の方が女子に比べて肯定的に自己の性役割を受容している。また、反対に否定的な性役割の受容に関しては女子の方に高い。男子と女子との間のこの差が何を意味しているかについては、上述の性役割の形成に関わる日本社会の文化・時代の要請などが考えられるだろう。

藤田・高嶋・林も、同様の調査を小学生5、6年の男子と女子332名<sup>10)</sup>、中学生1～3年の女子690名<sup>11)</sup>、大学生1、4年の女子704名<sup>12)</sup>を対象に実施している。それによると、

- (1) 小学生5年 男子77.5% (0%), 女子53.7% (3.8%)  
小学生6年 男子75.3% (0%), 女子36.8% (17.2%)
- (2) 中学生1年 男子 ……………, 女子37.4% (13.9%)  
中学生2年 男子 ……………, 女子33.9% (16.5%)  
中学生3年 男子 ……………, 女子40.9% (13.0%)
- (3) 大学生1年 男子 ……………, 女子55.0% (10.9%)  
大学生4年 男子 ……………, 女子59.8% (7.8%)

という結果が得られた。女子が中心であり、また女子大学生のデータが加わっているものの、上記の東京都におけるデータと大きな違いは見られない。

以上の問題意識に基づいて、今回は特に女子大学生を対象に、性役割に関する3つの側面の内から、性役割受容性と性役割観との関係の測定を試みる。性役割の測定には、いくつかのスケールが開発されている。例えば、Terman<sup>13)</sup>から発展したM-F (Masculinity-Femininity) テスト、村中<sup>14)</sup>の性度検査、Bem<sup>15)</sup>のBSRI (Bem Sex-Role Inventory) などが知られているが、本研究で測定しようとする手続きは、厳密な意味での統計的手法によるものではない。

## II. 研究 I

### 【研究の目的】

発達の加速現象 (acceleration) が進んでいる今日において、思春期から青年期に位置する男性と女性の身体的成熟は早まっている。それに伴い、同性や異性に対する性差意識あるいは性役割観も推移していると思われる。本研究は女子青年の中から発達段階では青年後期にあたる女子大学生を対象にして、①彼女たちの女性性受容の方向を調査し、②彼女たちが日常意識化している open-end な女性像 (女性からみた女性役割) を捉え、③女性性受容と女性像との関係を検討することが目的である。ここで、女性性受容の方向によって、女性像の肯定的な側面と否定的な側面にどのような差異がみられるのかを明らかにしたいと考える。

### 【研究の方法】

1. 調査対象者 東京都および埼玉県に通学する女子大学生1, 2年生で、集計される最終的な対象者数は298名である。

2. 調査材料 調査のための質問項目は、性差および性役割の方向の中から本研究の目的に沿うように、表2に示す主として3種類の項目で構成されている。若干の説明を加えよう。

(a)質問1は、女性性受容の傾向を測定するために従来から用いられてきたものである。

(b)質問2は、現実の女性性受容の程度を多角的に捉えるために設定された。この種の質問は非現実的な枠を出ないのだが、自己の性の位置づけを知る上で効果的な項目である。

(c)質問3は、女性像を広く捉えるために用意されたもので、Kuhn, M.の創始した20答法 (Twenty Statement Test) を参考にしている。20答法は、本来、個人の自己意識や自己概念を測定するための方法として開発されたものである<sup>16)</sup>。それは「私は」という言葉に続いて、20通りの異なる自己についての答えを書いてもらうことで、自己に関する多様な側面を分析しようとする。回答は個人の自由裁量に任されるため、厳密な意味での統計的な処理は難しいが、個人的文脈を広く社会的文脈に対応させて知ることができるので、心理学上の利用価値は高いと思われる。本研究では、この20答法の枠組みを応用して「女子 (女性) は」のあとに20通りの異なる女子 (女性) についての記述を求めることにした。

3. 手続き 調査は通常の講義時間に行われた。質問1と2は、どちらかを選択するように指

表2 調査用紙の概要

---

質問1 あなたは「女子（女性）」に生まれてよかったと思いますか。  
 ア. よかった                      イ. 残念だった

質問2 今度、生まれ変わるとしたらどちらの性になりたいと思いますか。  
 ア. 女子（女性）                  イ. 男子（男性）

質問3 つぎの「女子（女性）は・・・」のあとに、思いついた言葉（文章）を  
 20通り書いてください。

1. 女子（女性）は \_\_\_\_\_

2. 女子（女性）は \_\_\_\_\_

3. 女子（女性）は \_\_\_\_\_

}

20. 女子（女性）は \_\_\_\_\_

---

示し、選択の理由がある場合には余白に書いてもらった。質問3については、特別な時間制限を設けないが、必ず20通りの女性像を記述するように教示した。

4. 集計 得られた調査資料は、質問1と2での単純集計を基に、質問3との関係でクロス集計を施した。本来の20答法の分析では、例えば、①合意反応・非合意反応、②ローカス・スコア (locus score)、③特定反応の出現、④記述項目の内容分類、⑤回答内容の心理的負荷、などが知られている。本研究では、上記の分類を参考にしながら、いくつかの分析カテゴリーを設けて量的に集計した。

#### 【結果と考察】

##### 1. 女性性受容と性再生との関係

表3は、女子大学生298名が①現時点で女性性役割を受容するか否か、②女性性役割を将来も受容するか否かの結果をまとめたものである。ここで、「女子（女性）に生まれてよかった」にチェックした者を「女性性肯定」、反対に「女子（女性）に生まれて残念だった」にチェックした者を「女性性否定」とした。また、「今度、生まれ変わるとしたら女子（女性）」にチェックした者を「女性－再生」、反対に「今度、生まれ変わるとしたら男子（男性）」にチェックした者を「男性－再生」とした。

女子大学生は、自己の性を肯定的に捉える傾向が強いようで、全体の85.6%が「女性に生まれてよかった」と女性性に与えられた役割をポジティブに捉えている。この数値は、過去に調査した結果（大学1年生で55.0%、4年生で59.8%）よりも遙かに高い。これは「どちらでもない」という緩衝的な選択肢がなかったことと、彼女たちの生活経験の満足性に由来していると思われる。実際にその理由をまとめてみると、①「女性は得である」という周囲からの特別視・特別扱いによるもの、②「男性のような社会的責任から免除される」という男性役割の躊躇、③「子ど

表3 女性性と性再生との関係 (N=298)

	女性－再生	男性－再生	計
よかった 女性性肯定	170 (57.0%)	85 (28.5%)	255 (85.6%)
残念だった 女性性否定	2 (0.7%)	41 (13.8%)	43 (14.4%)
計	172 (57.7%)	126 (42.3%)	298

もが産める」「やさしさ・思いやりがある」「おしゃれができる」という女性に与えられた特性の肯定、④「今の生活に満足し、女性が好き」という社会性を背景とした認識などに分類されることから理解できる。

一方、性再生の意識では、「女性－再生」57.7%と「男性－再生」42.3%が接近している。同性（女性）を再生する理由は、上記の女性性受容と類似して、①「今の生活に満足している」が最も多く、以下、②「社会的責任が免除される」、③「得である」などが続いている。反対に、異性（男性）を再生する理由は、①「現在、女性だから今度は男性を体験したい」「違う立場、観点から物事を見たい」という両価値的な志向、②「男性は自分の好きなことができる」「男性は能動的な行動ができる」「できなかったことにチャレンジできる」「自分を生かせる仕事に打ち込める」といった、これからの社会生活を営む上で女性であるがゆえの不満などに基づくことが多い。

そこで、表3のクロス集計の結果を見ると、「女性性肯定」で「女性－再生」を選択した比率が最も高く全体の57.0%、次に「女性性肯定」で「男性－再生」が28.5%、「女性性否定」で「男性－再生」が13.8%などの順になっている。各細胞の出現率の差はもちろん有意 ( $\chi^2=57.98$ ,  $df=1$ ,  $p<0.01$ ) であるが、「女性性肯定」が必ずしも「女性－再生」にならないところに、彼女たちのアンビバレントな感情が伺える。

## 2. 20答法に現れた女性像の位置

調査対象者全員が20種類の女性像を記述した後に、「あなたが書いた20通りの回答の中で、女子（女性）にとって最も重要で好ましいものを1つ選んで○印をつけてください。反対に、全く重要でなく好ましくないものを1つ選んで×印をつけてください」という旨を教示した。図1は、全対象者298名の結果である。○印あるいは×印がついた20答中の位置を、仮説的ではあるが5

答づつに分けて示した。図中の■は○印、⊗は×印がつけられた比率である。肯定的な女性像は、1～5答の中に44.3%（その後は、25.8%→13.4%→16.5%）が入るが、否定的な女性像は20答が進む（14.4%→22.5%→30.9%→32.2%）につれて増大する。これは、大変興味深い結果と思われる。つまり、調査対象者である女子大学生が自身の性についてのイメージを求められると、比較的前半にポジティブなものが先行することを意味するが、女性性を肯定した人数が多いことも無関係ではないだろう。そこで、質問1、2との関係（女性性と性再生との関係）をクロスさせたものが表4である。（注）にもある通り、①③⑤⑦は肯定的な女性像として選択されたものの、②④⑥⑧は否定的な女性像として選択されたものである。特に①と③とを比較すると、全体の頻度は異なるが、よいイメージが女性性肯定者の前半に生じやすいことが理解できる。

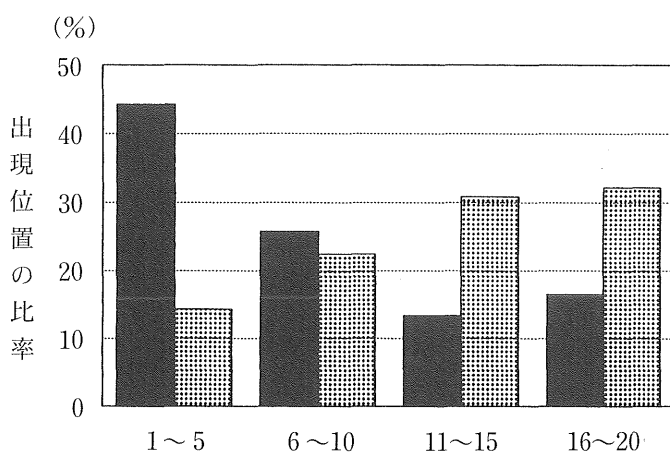


図1 女性像の肯定・否定の出現位置（全体）

表4 20答法に現れた女性像の位置と性意識との関係（頻度）

位置	女性性肯定		女性性否定		女性－再生		男性－再生	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1～5	120	35	12	8	78	23	54	20
6～10	64	57	12	10	43	36	34	31
11～15	31	82	10	10	22	59	18	33
16～20	40	81	9	15	29	54	20	42
計	255	255	43	43	172	172	126	126

（注） ①③⑤⑦は、肯定的な女性像として選択されたもの。

②④⑥⑧は、否定的な女性像として選択されたもの。



## 3. 20答法に記述された女性像の内容

次に、ここで先に述べた女性にとって最も“重要－重要でない”選択回答（○印と×印がついたもの）の記述について集計した。表5は肯定的な女性像、表6は否定的な女性像の結果をまとめたものである。集計にあたっては、過去の研究<sup>12)</sup>や予備調査などを参考にして、あらかじめ出現頻度の高い回答項目をカテゴリー化することに準拠した。表5の肯定的な女性像で最も頻度の高かったのは、「子どもを産む、母親になる」22.1%という女性役割の典型的なカテゴリーであった。当然と言えば当然のことであるが、思いつくであろう女性役割についてのイメージの中で、「出産と育児」という概念が最も強いインパクトを女性自身に与えていると解釈できる。さらに、表5のカテゴリーで類似の項目を集めると、女性は「やさしく、明るく、親切で、思いやりがあって、美しく、かわいい」という性格的・外見的な特性が、①で42.0%、②で37.2%、③で37.8%、④で46.0%、⑤で38.2%、⑥で49.4%、⑧で39.0%、全体で41.3%である。女子大学生は、かなり現実的で固定的な観念を持って自身の女性像を評価し、女性役割を位置づけているものと推測される。

これに対して、否定的で好ましくない感情を伴う女性像については、同種の回答が少ないので大きなカテゴリーで分類した。表6の(a)～(i)までがそれである。全体で「集団を組んで、おしゃべりが好き」という社会的な側面に22.8%、「陰険、わがままで、ずるいくせに臆病」という性格的な側面に20.8%、「おしゃれや化粧にこり、容姿を気にする」という外見的な側面に14.1%、

表5 肯定的な女性像として記述された内容（頻度）

女 性 像	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計
(a) 子どもを産む、母親になる	54	12	41	25	41	13	—	12	66
(b) やさしい	49	4	36	17	36	13	—	4	53
(c) 明るい、親切、気がつく	26	7	14	19	14	12	—	7	33
(d) 男性・他者への意識、依存	16	3	13	6	13	3	—	3	19
(e) 思いやりがある	13	1	6	8	6	7	—	1	14
(f) 女性らしく生きる	11	1	6	6	6	5	—	1	12
(g) 美しい、きれい	9	3	5	7	5	4	—	3	12
(h) かわいい	10	1	4	7	4	6	—	3	11
(i) 家庭的である	4	1	5	—	4	—	1	—	5
(j) 結婚と人生の変化	2	2	3	1	2	—	1	1	4
(k) その他	61	8	39	30	39	22	—	8	69

(注) ①性肯定 N=255, ②性否定 N=43, ③女性再生 N=172, ④男性再生 N=126, ⑤性肯定－女性再生 N=170, ⑥性肯定－男性再生 N=85, ⑦性否定－女性再生 N=2, ⑧性否定－男性再生 N=41。

表6 否定的な女性像として記述された内容（頻度）

女性像	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	計
(a) 社会的行動・対人関係	57	11	40	28	40	17	—	11	68
(b) 性格特性や態度	57	5	38	24	38	19	—	5	62
(c) 外見的な装飾や容貌	33	9	23	19	23	10	—	9	42
(d) 身体的・生理的な側面	36	4	20	20	20	16	—	4	40
(e) 日常の生活経験	21	4	14	11	14	7	—	4	25
(f) 家庭環境・躰・社会的制約	10	6	8	8	7	3	1	5	16
(g) 能力・知性・思考	7	—	4	3	4	3	—	—	7
(h) 年齢による変化	3	2	2	3	2	1	—	2	5
(i) その他	31	2	23	10	22	9	1	1	33

(注) ①性肯定 N=255, ②性否定 N=43, ③女性再生 N=172, ④男性再生 N=126, ⑤性肯定-女性再生 N=170, ⑥性肯定-男性再生 N=85, ⑦性否定-女性再生 N=2, ⑧性否定-男性再生 N=41。

「体格や体力、生理的に弱者」という身体的な側面に13.4%などに、女性像としてネガティブなイメージを抱いている。このような評価は、日常の彼女たちが精神的に、そして他者、特に自分自身の人間関係において感じている点なのかもしれない。

### Ⅲ. 研究Ⅱ

#### 【研究の目的】

研究Ⅰにおいて、女子大学生の性役割に対する心理構造を従来の研究方法と異なる手続きによって検討した。そこでは、①彼女たちの女性性受容の方向を基準に、②彼女たちが日常意識化している広範囲な女性像を捉え、③女性性受容と女性像との関係を明らかにする目的で、具体的には Kuhn, M. による20答法の理論を参考にして、女子（女性）について20通りの回答を求めて比較した。研究Ⅰでは、特に内容にチェックが加えられた“重要-非重要”な項目を取り上げ、各カテゴリーごとの出現率を分析した。研究Ⅱでは、20答に現れたすべての回答内容を女性性の受容と非受容との観点から比較することが目的である。

#### 【研究の方法】

1. 調査対象者 ここでの調査対象者は研究Ⅰと同一の女子大学生で、東京都および埼玉県内に通学する298名である。
2. 調査材料と手続き データについても研究Ⅰと同一である。
3. 集計 上記の調査対象者の中で、「女性に生まれてよかった」と回答した者と、「女性に生

まれて残念だった」と回答した者をそれぞれ43名ずつ、合計86名を選び分析対象にした。

### 【結果と考察】

#### 1. 分類カテゴリーの設定について

記述された女性像の内容をいくつかのカテゴリーに分類するが、ここでは研究Ⅰの結果に基づいて合計13種類に決定した。具体的な記述を示しながら提示してみよう。

- (a) 否定的な性格特性や態度：陰険である、わがままである、ずるい、ずうずうしい、生意気である、自己中心的である、嘘つきである、などの記述。
- (b) 肯定的な性格特性や態度：やさしい、明るい、強さを持っている、気配りをする、思いやりがある、親切である、素直である、などの記述。
- (c) 外見的な装飾や容貌：美しい、きれい、かわいい、おしゃれができる、華やかである、身だしなみに気をつける、お金がかかる、などの記述。
- (d) 身体的・生理的な側面：生理がある、子どもを産む、母親になる、冷え性である、力がない、行動がにぶい、などの記述。
- (e) 日常生活習慣や経験：食事の支度をする、掃除をする、洗濯をする、子育てをする、買物をする、料理が好きである、などの記述。
- (f) 他者への依存・甘え：他者に守られる、他者に頼れる、などの記述。
- (g) 家庭環境・躰・社会的制約：礼儀作法や躰がきびしい、制限が多い、男性に比べて地位が低い、重要視されない、仕事が制限される、などの記述。
- (h) 能力・知性・思考：賢い、頭がいい、仕事ができる、字がきれい、などの記述。
- (i) 恋愛や結婚への過程：男性との恋愛関係や結婚を前提とした記述。
- (j) 家族や友人との関わり：家族との絆や友人との仲間意識などに関する記述。
- (k) 社会への進出・自立：女性も自立すべきである、仕事や生き甲斐を持つべきである、などの記述。
- (l) 加齢による変化：寿命、長寿、加齢による心身の変化、などの記述。
- (m) その他。

である。この分類はあくまでも仮説的なものである。表7は、上記のカテゴリーに基づいて回答内容を分類したもので、20答を5答ずつに分け、それぞれの位置に(a)~(m)がどの程度分布するのかを分析した。

#### 2. 出現位置と女性像との関係

まず、全体（総数は43人×20答＝860）を通して見ると、女性像として一番多かったのは、受容群も非受容群も「陰険で、わがままで、自己中心的」といった(a)否定的な性格特性や態度のカテゴリーに入るもので、両群ともそれぞれ20.2%、21.5%となり、両群に有意な差はない。これに対して「やさしく、明るく、思いやりがあって、親切」などの(b)肯定的な性格特性や態度のカテゴリ

表7 女性像として記述された内容

女性像	指標		1～5		6～10		11～15		16～20		1～20	
	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	① 計	②
(a) 否定的な性格特性や態度	23 (13.2)	54 (29.1)	44 (25.3)	49 (26.5)	61 (35.1)	41 (22.2)	46 (26.4)	41 (22.2)	174 (20.2)	185 (21.5)		
(b) 肯定的な性格特性や態度	64 (42.7)	44 (40.7)	34 (22.7)	17 (15.7)	29 (19.3)	25 (23.2)	23 (15.3)	22 (20.4)	150 (17.5)	108 (12.6)		
(c) 外見的な装飾や容貌	46 (32.9)	35 (23.5)	31 (22.1)	40 (26.8)	28 (20.0)	39 (26.2)	35 (25.0)	35 (23.5)	140 (16.3)	149 (17.3)		
(d) 身体的・生理的な側面	31 (38.3)	25 (26.3)	22 (27.1)	27 (28.4)	11 (13.6)	23 (24.2)	17 (21.0)	20 (21.1)	81 (9.4)	95 (11.1)		
(e) 日常の生活習慣や経験	7 (11.5)	7 (12.5)	22 (36.1)	14 (25.0)	16 (26.2)	20 (35.7)	16 (26.2)	15 (26.8)	61 (7.1)	56 (6.5)		
(f) 他者への依存・甘え	12 (22.2)	4 (14.8)	9 (16.7)	6 (22.2)	18 (33.3)	9 (33.3)	15 (27.8)	8 (29.7)	54 (6.3)	27 (3.1)		
(g) 家庭環境・躰・社会的制約	7 (14.9)	22 (30.1)	16 (34.0)	17 (23.3)	10 (21.3)	13 (17.8)	14 (29.8)	21 (28.8)	47 (5.5)	73 (8.5)		
(h) 能力・知性・思考	3 (7.3)	5 (12.5)	14 (34.2)	11 (27.5)	14 (34.2)	14 (35.0)	10 (24.3)	10 (25.0)	41 (4.8)	40 (4.7)		
(i) 恋愛や結婚への過程	6 (17.1)	4 (10.3)	9 (25.7)	11 (28.2)	9 (25.7)	10 (25.6)	11 (31.5)	14 (35.9)	35 (4.1)	39 (4.5)		
(j) 家族や友人との関わり	6 (18.2)	6 (13.0)	6 (18.2)	16 (34.8)	9 (27.3)	7 (15.2)	12 (36.3)	17 (37.0)	33 (3.8)	46 (5.3)		
(k) 社会への進出・自立	8 (47.1)	5 (31.2)	2 (11.8)	4 (25.0)	4 (23.5)	4 (25.0)	3 (17.6)	3 (18.8)	17 (2.0)	16 (1.9)		
(l) 加齢による変化	0 —	2 (10.0)	3 (20.0)	3 (15.0)	4 (26.7)	8 (40.0)	8 (53.3)	7 (35.0)	15 (1.6)	20 (2.3)		
(m) その他	2 —	2 —	3 —	0 —	2 —	2 —	5 —	2 —	12 (1.4)	6 (0.7)		

(注) (1) 1～5, 6～10, 11～15, 16～20の指標は20答の中の位置を現す。

(2) ①は女性性の受容者を, ②は女性性の非受容者を現す。

(3) 表中数字の上段は頻度を, 表中数字の下段括弧内は% (頻度計を基準にする) を現す。

一は、両群で比較的大きな差が見られる。受容群は、肯定的な女性像をイメージしやすい傾向にあるのかもしれない。さらに、(c)外見的な装飾や容貌を加えた(a)(b)(c)で全体の50%以上を説明してしまう。女子大学生から見た女性像は、女性自身が持っている性格特性や態度と外見的な側面というところから、先ず視線を向けるらしいのである。

次に、出現位置との関係で見ると、非受容群は(a)や(g)社会的制約の有無を、受容群よりも回答の初期にイメージ化する傾向がありそうである。おそらく、社会や家庭などにおける種々の制限や礼儀作法の強要を否定的に捉えることが、ネガティブな女性像を映し出すのだろう。20答の後半で回答に苦勞するあたりから、初期に書いた内容の繰り返しや、身近な生活体験などの記述が目を引きようになる。

#### IV. 要 約

本研究は、青年後期に位置する女性から見た女性像を広汎な角度で捉えようとした。問題提起では、性差および性役割の概念と諸研究について概観した<sup>17)</sup>。また、過去に発表した2、3の研究データについても触れた。

研究Iにおいて、女子大学生298名に、①女性性受容に関する項目、②性再生に関する項目、③女性役割のイメージ化に関する項目の3質問を与えた。得られた結果は以下の通りである。

- (1) 女性性に生まれたことを肯定する者が全体の85.6%、その中で女性一再生を意図する者が57.0%見られた。
- (2) 好ましい女性像は20答の前半に多く見られ、その記述はポジティブな性格的・外見的な側面と身体的・生理的な側面に集中する。
- (3) 好ましくない女性像は20答の後半になるにつれて増加し、その記述はネガティブな性格や社会的態度・対人関係の側面に多い。

研究IIにおいて、女性性の受容者と非受容者それぞれ43名ずつを対象に、20答すべての内容をあらかじめ設定したカテゴリーに分類した。得られた結果は以下の通りである。

- (1) 全内容の中で最も多くを数えた記述は、否定的な性格特性や態度に関するもので、肯定的な性格特性や態度に関するもの、外見的な装飾や容貌に関するものが続いた。
- (2) 出現位置との関係では、最初の5答に限ると、女性性受容群は、肯定的な性格特性や態度、外見的な装飾や容貌、身体的・生理的な側面などに集中しやすい。女性性非受容群は、否定的な性格特性や態度、肯定的な性格特性や態度、外見的な装飾や容貌などの側面に集中しやすい。

今後は、多様な回答の相互関連性をさらに検討するとともに、青年期で得られた諸結果と種々の発達段階にある集団で得られた諸結果とを比較しながら、性差意識や性役割観について、一層

深い心理学的な意味を追究していく必要があるものと思われる。

〈引用文献〉

- 1) 清水弘司：性役割の発達。詫摩武俊・飯島婦佐子（編），発達心理学の展開，新曜社，1982.
- 2) 東 清和・小倉千加子：性差の発達心理。大日本図書，1982.
- 3) 福富 護：性の発達心理学。福村出版，1983.
- 4) 飯野晴美：性役割という概念の多面性について。心理学評論，27，158-171，1984.
- 5) Lynn, D. B.: A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. Psychological Review, 66, 126-135, 1959.
- 6) Biller, H. B.: Father dominance and sex-role development in kindergarten boys. Developmental Psychology, 1, 87-94, 1969.
- 7) 柏木恵子：現代青年の性役割の習得。依田新・他（編），現代青年の性意識，金子書房，1973.
- 8) 高嶋正士・間宮 武・柏木恵子他：男性・女性・性差の今日的課題。応用心理学研究，7，33-52，1982.
- 9) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会（編）：現代っ子の性。教育開発研究所，1984.
- 10) 藤田主一・高嶋正士・林 倫子：児童における性差意識の特徴(1)(2)。日本応用心理学会第53回大会論文集，130-131，1986.
- 11) 藤田主一・高嶋正士・林 倫子：女子中学生の性差意識(1)(2)(3)。日本応用心理学会第52回大会論文集，102-104，1985.
- 12) 高嶋正士・藤田主一・林 倫子：女子大学生における性差意識の発達に関する研究。共立女子短期大学家政科紀要，32，129-139，1989.
- 13) Terman, L. M. & Miles, C. C.: Sex and personality. New York, McGraw-Hill, 1936.
- 14) 村中兼松：性度心理学—男らしさ・女らしさの心理。ぎょうせい，1974.
- 15) Bem, S. L.: The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162, 1974.
- 16) 星野 命：20答法。詫摩武俊（監修），パッケージ・性格の心理6，ブレーン出版，1986.
- 17) 間宮 武：性差心理学。金子書房，1979.